

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

じゃつ、じゃじゃつ、じゃつ……。こんな音を立てているかどうかはわからないけれど、一匹の蟻がせわしなく砂浜の上を歩いている。どこに向かおうとしているのか。あつちに進んでは、ちよつと立ち止まり、その首をかるく左右にひねったかと思うと、すこし進路を変え、またなにこともなかったかのように歩きます。

この蟻の姿をぼんやり眺めていると、いろいろな思いがよぎる。「どこに向かおうとしているのか……」「迷子にでもなったのだろうか。ちゃんと巣に辿り着けるだろうか……」「なにをそんなに慌てているのだろう、子どもたちが餌でも待っているのかな?」。

もつとも、こうした思いは蟻にとっては「①よけいなお世話だよ!」ということなのだろう。その行く手をさえぎろうと手をかざしても、そんなことにはおかまいなしである。先を急ぐように、すぐに砂にもどって歩きはじめるのだ。

ここしばらく、蟻の姿などをのんびりと眺めるようなことはなかったなあ……と思っていたら、いま目の前を②そうしたことを思いださせてくれるモノが行き来する。床の上を動きまわりながらホコリを吸い集めてくれる〈お掃除ロボット〉である。子どものころに戻って、その様子をしばらく眺めてみたい(ロボット技術は日々進化を遂げている。不用意な誤解を避けるため、本書に登場するのは架空のお掃除ロボット(ルンルン)である)。

電源スイッチらしきボタンを押してみる。すると、ピポッ、ピポッ、プーッ……という軽快な電子音とともに、それは動きだした。「さて、どこからはじめようかな……」とでもいいかげんに、クルリとあたりを見わたす。そしてひとたび狙いを定めると、クーンと甲高いモーター音をたてて動きはじめるのだ。

ロボットは、テーブルの下や椅子のあいだをくぐり抜けながら、床の塵やホコリをかき集め、それを吸い込んでいく。ゴツンゴツンと部屋の壁や椅子などにぶつかるたびに、その進行方向を小刻みに変える。「それだけなのかな?」としばらく様子を眺めていると、なにか思い立ったように途中で方向転換をし、部屋の反対方向へと移動しはじめたりする。あるときは壁づたいに小さくコツンコツンと当たりながら、その隅にあるホコリを丁寧にかき集めていく。

この気ままなお掃除ぶりは、はたして効率的なものなのか。同じところを行ったり来たりと重複も多そうだ。たぶん取りこぼしているところもあるにちがいない。それでも許してしまうのは、③その健気さゆえのことだろう。

小一時間ほど走りまわると、ちよつと疲れたようにして自分の充電スタンドへと舞い戻っていく。そのすこし速度を落としての、小さく腰を振る所作がかわいい。塵の収納スペースに集められたホコリや塵の量を見て、思わず「ごくろうさん、よく頑張ったね」と労いの言葉をかけそうになる。

これまでの家電とはどこか趣がちがうようだ。そのロボットの動きを思わず追いかけてしまう。「どこに向かおうとしているのか、なにを考えているのか」と、その行く手をさえぎるなどして、いたずらをしてみたくなる。あるいはすこし先回りをしながら、床の上

にa無造作に置かれた紙袋を拾い上げ、部屋の片隅にある乱雑なケール類をbタバねていたりする。これもロボットのためなのだ……。「あれれ? これでは④主客転倒ということになってしまっているのか」と思いつつも、それはそれで許してしまう。ロボットにお掃除してもらうのはうれしいけれど、ほんのすこし手助けになれているという感覚も捨てがたい。

このロボットが袋小路に入り込むことのないように、テーブルや椅子をcセイゼンと並べなおす。もつと動きやすくしてあげようと、観葉植物の鉢などのレイアウトを変え、玄関のスリッパをせっせと下駄箱に戻す。そうしたことを重ねていると、なんだか楽しくなってくる。そして、いつの間にか家のなかにはセイゼンと片づいていたりする。

いったい誰がこの部屋を片づけたというのか。わたしが一人でおこなっていたわけではないし、このロボットの働きだけでもない。一緒に片づけていた、あるいはこのロボットはわたしたちを味方につけながら、ちゃっかり部屋をきれいにしていたとはいえないだろうか。

そもそも、部屋の隅のコードを巻き込んでギブアップしてしまう、床に置かれたスリッパをひきずり回したり、段差のある玄関から落ちてしまうとそこから這い上がれないというのは、これまでの家電製品であれば、改善すべき欠点そのものだろう。

(中略)

一人の学生が学内のロビーにある長椅子に腰かけて、いつもの漫画雑誌を読みふける。その足元には、無造作に転がった空のペットボトル、誰かが残していったものなのだろう。部屋の片隅には、ゴミ箱らしきものもあるけれど、この状態ではペットボトルは転がったまままだ。学内のいつもの風景とは⑤このようなものだろう。

では、「このゴミ箱を生き物のように動かしてみたら……」というわけで、部屋の隅で静かにしていたゴミ箱を(ロボット)として動かしてみた。それは床の上に転がるペットボトルのほうにヨタヨタと近づいていき、それを確認するように視線を落とす。そうして、自分では拾えないことを悟ると、その学生のほうに擦り寄るようにして近づき、すこし腰を屈めてみる。その姿は、あたかも「このペットボトルを拾ってよ!」と⑥ようなのだ。

そのロボットの仕草に気づいたのか、それを無視するわけにもいかず、学生はペットボトルを拾い上げ、〈ゴミ箱ロボット〉のバスケットのなかに放り込んであげる。すると、そのことを感知した(ゴミ箱ロボット)はまた腰を屈める。同じ仕草にもかかわらず、それはなにかお礼を返しているようにも映る。そうして、その場をまたヨタヨタと去っていく。学生もほっとしたようにして、またもの雑誌に目を落とすというわけである。

とりたてて、すごい技術を備えたものではない。ヨタヨタしていて、なにも役に立ちそうもない。そんな風采にもかかわらず、人に擦り寄るようにして、ちゃっかりゴミを拾い集めてしまうというのは、なかなか侮れないものだろう。

わたしたちのために黙々と働くことを期待されるロボットだけだ、「ゴミを黙々とつみ上げるロボット」とそこで「ただゴミを拾ってもらう学生」という非対称な関係は、この場にはそぐわない。例えば、無造作に捨てられたペットボトルのところに、ロボットがすーっと近づいてきて、それを黙々と拾い上げ、なにもなかったように立ち去っていく。そんな風景とくらべてみると、人の手を煩わせながらも、ヨタヨタしながら一緒にゴミを拾い集めるという姿はなんだか微笑ましいのだ。(中略)

では、わたしたちの手助けを思わず引きだしてしまうような場合は、どのようにして生まれてくるのだろうか。他者から挨拶された時に、思わず応答責任を感じてしまうことに重なるけれど、⑦ロボットとわたしたちとのあいだに生じるコミュニケーションの一つの事態としても見逃せないものである。

その基本になっているのは、単なるモノなのか、なんらかの意思を持った生き物なのか、ということだろうか。「ゴミを拾い集めようとしているのかな……」と、そんな意思が伝わってくれば、それを助けてみようという気にもなる。でも、それにも程度というものがあるようだ。

じつとしたまま、そこを行き交う人に「そのゴミを拾って！」と声高に訴えかけるのでは、周りからの手助けは引きだせそうもない。一方的に指示されているようで、たとえ手を貸してあげたとしても、「なにか、いいことをした！」という気持ちになれない。なにか服従を強いられているようで具合がよくないのである。それと、一方的に周りの人に依存するだけでは、「頼るもの」⇕「頼られるもの」という非対称的な関係となってしまう。(中略)

わたしたちの共同行為を生みだすためのポイントは、自らの状況を相手からも参照可能なように表示しておくことである。「いま、どんなことをしようとしているのか」「どんなことに困っているのか」「そうした「弱さ」を隠さず、ためらうことなく開示しておくことで、お掃除ロボットは周りの手助けを上手に引きだしているようなのである。

『「弱いロボット」の思考 わたし・身体・コミュニケーション』

岡田美智男

問一 — ①「よけいな世話だよ！」とありますが、「よけいな世話話」と最も近い慣用表現を次から選びなさい。

- ア ふんだりけつたり イ ありがためいわく
ウ わたりに船 エ ねこに小判

問二 — ②とありますが、「そうしたことを思いだ」したのはなぜですか。次から選びなさい。

- ア おもしろい動き方をする〈お掃除ロボット〉が、蟻を眺めている時と同じ気持ちにさせるから。
イ せわしく動き回る〈お掃除ロボット〉が、のんびりする時間を持ってない自分の姿と重なるから。
ウ むだな動きのない〈お掃除ロボット〉を見ると、蟻に手を出した時のように動きをさえぎりたくなるから。
エ 高度な機能を持つ〈お掃除ロボット〉を見ると、ロボット技術のなかった子ども時代が懐かしくなるから。

問三 — ③とありますが、「健気」という言葉から、筆者がお掃除ロボットに対してどのようなことを感じているとわかりますか。次から選びなさい。

- ア 行く手をさえぎられても構うことなく掃除を続ける様子に、意志の強さを感じている。
イ 物にぶつかるままに柔軟に進路を変えて掃除を続ける様子に、臨機応変さを感じている。
ウ 家具のすき間を自由に動き回って掃除をする様子に、かわいらしさを感じている。
エ 壁にぶつかりながらも隅々まで丁寧に掃除をする様子に、一生懸命さを感じている。

問四 — ④について

- 1、「主客転倒」の言葉の意味を次から選びなさい。
ア 主人と家来がともに失敗をしてしまうこと
イ 主人と客人の立場や軽重が逆になること
ウ 客観的なものの見方に偏ってしまうこと
エ 始めと終わりで主張が異なっていること
2、ここではどのようなことを言っているのか、わかりやすく説明しなさい。

問五 — ⑤「このようなもの」の指し示す内容を十五字以上二十字以下で書きなさい。

問六 — ⑥に入る言葉を次から選びなさい。

- ア 怒っている
イ 命令している
ウ お願している
エ 開き直っている

問七 — ⑦とありますが、「ロボットとわたしたちとのあいだに生じるコミュニケーション」は次のように行われます。後の問いに答えなさい。

ロボットがA「弱さ」を開示し、わたしたちが応答する時に、B共同行為が生みだされる。

- 1、A「弱さ」について、〈お掃除ロボット〉と〈ゴミ箱ロボット〉の「弱さ」を文中からそれぞれ一点あげなさい。
2、筆者が考える望ましいB共同行為のあり方とはどのようなものですか。それを説明した次の文のX、Yをうめなさい。わかりやすく書くこと。

筆者は、

X

関係ではなく、

Y

という共同行為が望ましい、と考えている。

問八 — a、b、cの言葉について、aは読みを書き、b・cは漢字に直しなさい。

一 一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

本文中の※については、注として本文の最後に付記しています。
わかりにくい言葉は（ ）内に意味を付記しました。

東日本大震災から一年も経たないころ、※祖母の『みそつかず』を読んでいた。つらく悲しい子ども時代の思い出が描かれたこの作品を、母や私が楽しんで読むことはないのだが、aシリウウとして確かめておくべきことが多く、手にとる頻度が高い。このときも何か調べる必要があった、どこに何が書いてあるか、充分①心得ているつもり of ページをばらばらとめくっていた。

すると、探していた内容とは関係ない一文が目にとまった。

「②人には運命を踏んで立つ力があるものだ」

あれ？ こんなことが書かれていたのだろうか、という新鮮味と③いぶかしく思う気持ちがあつて、脳裏には震災の報道で目にした映像がありありと浮かんでいた。なぜこの文と東日本大震災を結びつけたかは、自分でもわからない。ただ、震災で人の命や平穏な暮らしがいきなり奪われる様子があまりに理不尽で、たとえ真実であろうとも、災害とはそういうものという諦念(あきらめの気持ち)で心进行处理し、達観するにはあまりにも現実がきびしすぎた。

日本に暮らしている限り、災害と無縁でいられる場所はない。自分がその立場に立たされたとき、心に刻んでおくべきことは何か。「人には運命を踏んで立つ力があるものだ」という一文に、④震災以来、探していたことばの力を見つけた感があつた。

これを言ったのは曾祖父(ひいおじいさん)の※露伴で、語られた背景は実は災害とはまったく無関係の、しかも今の感覚では容易に共感できない文脈にある。

四男である露伴は、幼いころに弟や妹のおやつにするため、母親であるお猷様の言いつけで味噌汁を持って焼き芋を買いに行かされた。今ならばなんでもない子どものおつかいだ、封建的な色彩の強い明治初期には「いくら小さくとも男の子の体面というものには格があつて、※土分の子が焼芋買いに行くのは周囲の嘲笑(さげすんで笑うこと)をbマネク」と書かれている。自分ひとりの空腹なら我慢したかもしれないが、⑤見栄を張れば弟や妹も巻きぞえになった。

お猷様は露伴に「次男三男の※冷飯っ食い、芋買いがなんだ」と容赦なかった。井戸端でお米を⑥でいれば、同年輩の男子に冷やかされ、朝一番の仏壇の手入れをすっかり忘れれば、家族全員の朝食が滞った。

⑦恥ずかしさ、抵抗感(ひたひた)はよほどのものがあつたらしい。

だが、誰も自ら選んで次男三男に生まれるわけではない。露伴からさんざ小さいころの苦労話を聞かされて、自分自身も次女の生まれである祖母は、あるとき自分ではどうにもならない生まれ順による差別に不平を口にした。すると、露伴がむつとりとした口調で「人には運命を踏んで立つ力があるものだ」と言うのである。これを聞いて祖母は、かつて自分の父親がどれほどの思いで冷飯っ食いの境遇に耐え忍んだかを察し、自分の身にも父と同じだけの苦労が課されることを思つて⑧涙する。

「人には運命を踏んで立つ力があるものだ」という、人目を惹きつけることばの背景がこんなエピソードでは、なんだかあてがはずれたような

肩すかしをくらったような感覚を覚えるかもしれない。震災と兄弟の生まれ順はまったく別の話だが、共通するのは自分にはどうしようもないめぐりあわせという点である。我慢しようにも我慢できない、けれどさうするしかない状況を乗り越えようとするとき、励ましてくれることばという気がする。

このあたりのことをもう少し論理的に説いているのが、露伴の書いた「運命は切り開くもの」という随筆である。「此処に赤ん坊が生まれたと仮定します」という書き出しに始まり、生まれつきの貧富の差などにより、子どもの運命には自ずと差が生じるため、「誰でも彼でも自分が時を選び、処を選び、家を選び、自分の体質相貌等を選んで生まれたので無いということに思い当たつたならば、自然に運命前定(前もって定まっていること)が少なくとも一半は真理であるということを思うでしょう。運命が無いなどということは何程自惚の強い人でも云い得ない事でしょう」と、まずは運命前定説の理を認める。

しかし、前定なのは半分だけの真実であつて、すべてが先天的運命で決められていると思うのはまったくの間違いであるという。「人間たるものの本然(自然のありのまま)の希望、即ち向上心という高いものを蹂躪する(ふみにじる)卑屈の思想に墜ちて終いまして甚だ宜しく無い、即ちそれは現在相違という過失に陥ります、人は生きて居る間は向上進歩の望を捨てることは出来ぬものであります」とcダンゲンする。

そして、運命を天の定めとする占いへと話を移し、諸葛孔明の死とともに大きな星が墜ちたという逸話は軍談としてはおもしろいが、それなら星の数と人の数が対応していなければならず、「生まれた年月日時によつて人の運命が定められては⑨堪りません」と占いの類を過剰に信じてはいけなさと釘をさす。

一方、※人相学には理解を示し、すぐれた人相家は人の顔が変わることを知っているから的中させることができると説く。生まれつきの顔をもとに、心がけ次第で良くも、悪くも変化するのが人の顔だと。

つまり「天然自然に定まって居るものを先天的運命と申しますならば、当人の心掛けや行為より生ずるのを後天的運命と申しましょう。自己の修治(手を加えてよくすること)によつて後天的運命を開拓して、或は先天的運命を善きが上にも善くし、或は先天的運命の悪いのを善くして行くのが、真の立派な人と申しますので、歴史の上に光輝を残して居る人の如きは、大抵後天的運命を開拓した人なのであります」となる。ここで言われていることを煎じ詰めると、「人には運命を踏んで立つ力があるものだ」に行き着くのではないだろうか。いささかくどくどとした論旨の「運命は切り開くもの」に比べると、なんとすばつと見事な切り口だろうと思う。

『幸田家のことば』青木奈緒

注※

○祖母 幸田文。小説家。『みそつかず』は父の思い出を記した随筆集。

○露伴 幸田文の父。夏目漱石と同年生まれの明治の文豪。

○土分 武士の身分。

○冷飯っ食い 〓もともとは、江戸時代に家督を相続しない次男以下のものを卑しめて言った語。

○人相学 〓顔立ちから人の性格や才能を判定する学問。

問一 ― ①「心得ている」について答えなさい。

1、「心得る」の意味を解答欄に合うように熟語で答えなさい。

2、「心く」という一語の動詞になるように、ひらがなで答えなさい。

i 良質な音楽を（心）（まてお楽しみください。）

ii （心）（物語にほろりと涙がでた。）

問二 ― ②「人には運命を踏んで立つ力があるものだ」は、誰が言った言葉ですか、答えなさい。

問三 ― ③「いぶかしく思う気持ち」とは、ここではどのような気持ちですか、説明しなさい。

問四 ― ④「震災以来、探していたことばの力」とは、どのようなものですか。それがわかる文のはじめの五字を答えなさい。― ④より後の文から探すこと。

問五 ― ⑤「見栄を張れば」とありますが、その結果どうなりますか。わかりやすく答えなさい。

問六 「お米を」⑥で「とありますが、解答欄にあてはまるように、動詞を答えなさい。

問七 ― ⑦「恥ずかしさ、抵抗感」はよほどのものがあつたらしい」とありますが、誰のどういう恥ずかしさですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア お猥様の、息子がからかわれたり家族の朝食を用意できずにいたり、ふがいなく成長したことに対する恥ずかしさ。

イ お猥様の、士族という身分でありながら、息子に冷や飯を食べさせるなど十分な食事が用意できないことに対する恥ずかしさ。

ウ 露伴の、弟や妹の面倒まで見なければならず、同年輩の子と遊べず母親の言いなりになっていることへの恥ずかしさ。

エ 露伴の、士族の男子なのに焼き芋を買いに行かされ、当時女性の仕事だった炊事もやらなければいけないことへの恥ずかしさ。

問八 ― ⑧「涙する」とありますが、ここで「祖母」はなぜ涙を流したのですか。その理由をていねいに説明しなさい。

問九 ― ⑨「堪りません」の意味として最も適切なものを次から選びなさい。

ア やりきれない イ じれったい

ウ 不快である エ 不都合である

問十 本文の内容と合うものを次から二つ選びなさい。

ア 筆者は震災というきびしい現実の前でことばは力をもたない、と感じたことがあった。

イ 『みそつかず』はあまり目を通すことのない作品で、筆者も震災後久しぶりに読んだ。

ウ 「人には運命を踏んで立つ力がある」と「運命は切り開くもの」は、筆者にとって同じような意味を持つ。

エ 生まれつきの顔は、本人の努力とは関係なく善人のようにも悪人のようにも変えることができる。

オ 運命に左右されないで、自分と向き合って人生を築いていくことに露伴は意味を見いだしている。

問十一 a シリョウ、b マネく、c ダンゲンを漢字に直しなさい。

